

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「おいサンババア、何だよあれ。ぜんっぜん、似てねーし。よく美術の先生に怒られなかったな」

放課後、みんなが部活の支度^{したく}をしたり、帰る準備をしたりしている教室で、湯浅巧^{ゆあさたくみ}が教室入り口側の壁の一点を指さしてそう言った。巧が指さしたのは、昨日美術の時間に描き上げたばかりのシッカのジガゾウ¹だった。クラスはストップモーションをかけたいに一瞬^{いっしゅん}しんと静まりかえって、それからまたざわつきだした。

(いち、に、さん……)

シッカはうつむいて、全部で十七個ある机の傷をまた数えはじめる。

市川市立布野島中学校二年三組がスタートしてから三か月になる。

巧にサンババアと呼ばれた回数はいくら数えきれない。

加藤トモミ・フランシスカ。それがシッカのフルネーム。

「シッカ」はフランシスカの愛称だ。父母は一人っ子のシッカを、赤ちゃんのころからシッカと呼んでいた。おかげで、クラスメートにトモちゃんと呼ばれても、何だか自分の名前のような気がしない。

シッカの父はサンパウロ^(ブラジル)の都市生まれの、アフリカ系のブラジル人だった。地元市川市でブラジル料理店を営業している。

母は日本人のサンバ^(ブラジル)のダンスダンサー。小さなサンバ教室を開いていて、浅草サンバカーニバルにも毎年チーム出場していたりする。

母親がサンバダンサーだから、シッカまで、まとめてサンババア。シッカ自身はブラポル語^(ブラジル・ポルトガル語)、ブラジルで話されているポルトガル語も話せないというのに。こんな迷惑^{めいわく}なことがほかにあるだろうか。

はじめは、「やめなよ」とたしなめていたクラスの女の子たちも、最近はスルーしている。中にはくすつと笑っている子もいる

のを、知っている。男子は無視しているか、そうでなければ、うまいこと言ってんじゃねえよとか、でたサンババアとか、とはやしたてるだけだ。

少しずつ、サンババアという言葉が、クラスに浸透^{しんとう}している。

ほかの子と肌の色が違うことが、はじめて気になったのは幼稚園の年中のころだった。

クラス一の悪ガキだったリョウくんは、「チョコ、チョコ」とはやしたてられたのがはじまりだ。チョコレートは好きだけれど、もちろん名前ではなかった。「ちがうもんっ」と言い返してリョウくんの顔をにらんだ。だけど気づいてしまったのだ。違うのはシッカの方だった。

シッカの肌はほかの子たちと違って茶色だった。パーマもかけていないのに、髪の毛は、どれだけとかしても、くるりと巻いてしまう。濃くて長いまつげも、立派に天井を向いている。鼻はわし鼻で、ほかの子たちよりかなり高くて、大きい。

その日の夕食後、意をくっして「シッカちゃんて、チョコなの？ 茶色いから……？」と両親にたずねてみた。するとパパとママは顔を見合せて、にっこり笑って、おまえは茶色い子だよ、パパとママが愛する、魔法のチョコみたいに可愛い茶色い子だよ。そう言った。

黙^{だま}つてうなずきながら、シッカは、本当は首をかしげたかった。だってそんなの、

(聞いてないし)

いまならきつと、そう突っ込むことだろう。

五歳児^{さいじ}だって、大人のごまかしはわかるのだ。何も魔法のチョコの色をたずねたわけじゃない、パパとママが、シッカをいつも可愛いというのはわかっている。

シッカが知リたかったのは、ほかの子から見た、自分のことだ。

なぜ肌の色がみんなと違うの？ どうしてリョウくんはからかうの？ 茶色いとダメなことがあるの？ そういった疑問は、両

親が標準装備している「シッカ愛してる」ボタンを押した瞬間になかったことになって、シッカは二の句を継げなくなってしまう。知りたいのは、自分がどんなふうにと人と違うか、ということなのだ。

——一つわかることは、いまのシッカは、ただ、ただ、自分のすがたが嫌いだ。

茶色い肌とくると巻く髪とわし鼻、ついでに百七十センチ近くにまで伸びてしまった身長、それらが嫌いな自分、何もかもが気に入らないのであって、学校とはすなわち、十七個ある机の傷を毎日数えなおしにいくための場所だ。

本当はダンスは嫌いじゃないけど、そんなことは意地でも口にしない。たぶん、母親の思いどおりになるのがいやで、習っていたモダンバレエも小学校五年生のときにやめた。親の前で踊ったのは小六の運動会でのソウサクダンスが最後だ。

《シッカたち親子三人は、フエジオアーダなどのブラジル料理を囲んで夕食をとっていた。父親のミゲウは、

「ブラジルの魂」を受け継いでいるシッカにブラジルのことをもっと知ってほしいと、次の夏休みにサンパウロに長期滞在するよう勧めた。一方、母親の由美は、自分の好きなサンバの話ばかりをしている。シッカの思いを気にかけずに話を続ける両親に対して、シッカはいら立ちをつのらせ、ついに彼女の我慢は限界に達した。》

「……いいかげんにしてよ……」

火山になったシッカの口から溶岩がどろつとあふれだす。

「勝手すぎるよ。ママはサンバを選んで、ブラジル人のパパを選んだ。パパはママと日本を選んで、日本に住んでいまハッピーよかったじゃん」

手元のスプーンをにらんでいた視線を上げて、やっと両親の顔を見まわす。

「……でもあたしは、何にも選んでないのにこうなつた。ママだってさ、うちの学校でサンバ、パパって呼ばれてんの知ってる？いい歳して、サンバでも何でも勝手に踊ってればいいけどさ。あたしを、巻き込まないでよ！」

由美がぎくりと顔をこわばらせた。いつかテレビで見た、漁で船揚げされてすぐに電気ショックで殺されるマグロみたいに、一瞬で、目がうつろになった。ミゲウはまったく言葉をなくしている。

これまで、大声を上げてキレたこともほとんどないし、傷つけようとして母親を傷つけたこともない。母方の祖母のカタミのピアスを排水口に落としてしまったときも、授業参観にきた由美と目を合わせなかったときも。

(でも、ママがサンバをやっていたいなかったら、こんな思いをせずにすんだのは事実じゃない)

いまのシッカは、「傷つけてごめんなさい」どころか、青ざめたママの顔を見てザマアミロなんて思っている、いやな子だ。悪意というやつは、返す刀で自分を斬る。電気ショックを受けたのは、シッカも同じだった。

部屋のドアを乱暴に閉めて、ベッドに身を投げだした。

朝起きたときのまま、くしゃくしゃにわだかまっているタオルケットに顔をうずめる。

パパもママも何もわかっていない。もつと言つてやればよかった、というヘドロじみた気持ちと、少しの後悔とでぐちゃぐちゃになりそうだ。

タオルケットにわずかに残っている清潔な洗剤の香りをかいで、やっと少し気持ちが落ち着く。

シッカはベッドから身を起こすと、ベッドサイドに置いてあったiPod (持ち運びのできる小型音楽プレイヤー) のワイヤレスイヤホンを両耳に押し込んで、お気に入りのKポップ (韓国人の歌手が歌うはやりの音楽) を大音量で流した。こんなときこそ、ああ、思いきり身体を動かして踊りたいのに。

赤くなった目をこすりながら、机の横にあるルームミラーに、クローゼットから適当に抜きだしたワンピースをバサッとかける。身長より少し背の低い、縦長で、緑色の木枠のルームミラーを洋服で覆う、いつもの儀式。

——夜の間だけ、シッカは鏡にベールをかける。

鏡がキレイなのと自分が嫌いなのは、たぶん同じことだ。

朝の身支度をするときも、お風呂のときも、自室でも、キョクリヨク鏡を見ないようにしている。鏡は現実を突きつけてくる。いまのシッカが見たくないものを……。

朝、部屋を出るタイミングでワンピースを取り去るのは、昼間は両親、とくに母親が勝手に部屋に入ってくるからがあるからだ。気づかないかもしれないけど、剥き出しの自分の気持ちをさらすようでイヤだった。

(サンババア。巧。フェジョアード。ブラジルの魂……)

頭の中に、ハチが飛び回るように、不安な言葉が飛び交う。

洗剤の匂いをかいでルームミラーにカバーをするだけでは、足りない。

夜の九時半だった。シッカは何も持たずに自宅マンションを飛び出した。

リビングにいた両親には止められたが、コンビニに行くと言い放ってゆうづる公園に向かう。財布を持って出なかったことに、気づかれたかどうか。

お気に入りのゆうづる公園は、JR本八幡駅南口から高架に沿って、メディアロードを東に進むと高架下にあらわれる、小さな公園だった。元々は駐車場だったらしいそこは公園とは名ばかりで、がらんとしたアスファルトの敷地に、いまだに何に使うのかわからない謎の遊具があるだけの場所だ。自分以外に人がいるのをほとんど見たことがないが、一人になれるそこを、シッカは気に入っていた。

(……しばらく頭を冷やしてから、家に帰ろう)

だが、今夜のゆうづる公園には先客がいた。

申し訳程度にモウけられている入り口から公園に入る前から、音楽がきこえる。どん、どん、どん、と響く重いビート(リズムを)。しゃかしやか鳴る英語の歌詞。怖い人たちかな、と、そうつと公園の中を覗いたシッカの目に飛び込んだのは、意外な光景だった。

CDラジカセをアスファルトの地面に直置きして、二十代くらいの若い男が踊っている。そう、踊っている、ように思う。

シッカはほかの同年代の女の子よりダンスに詳しい。もう自分で踊ることはないけれど、ダンスに囲まれて育ったからだ。

これまでに見たことのあるダンスは、サンバや、母親がときどきよそのお教室の講師に呼ばれて踊ることがある社交ダンス、小学生のころ習っていたモダンバレエ、それに見たことがあるだけなら、いまだきのストリートダンス。

でもこの踊りは、そのどれとも違う。

一番違うのは、男のすがただ。男の右足の膝から先は途切れている。断ち切られた右足の先は、義足の黒いソケット(義足を体に接し続ける器具)に覆われている。

ぼんやりとした公園灯にテラされているだけのうす闇の中、白いTシャツにサーフパンツという身なりをした男の身体がうごめく。

アスファルトに倒れ伏した体勢から、両腕をついて、ゆつくりと上体を起こす。小ぶりの波に乗り上げる舟首のようにユウビでなめらかな動きだ。右足の義足一本を支点に、引き締まった左足を地面に沿わせるようにして全身を大弓のように反らせる。

上の高架に向かって差し伸べられた両手が、ゆつくりと胸をかきむしり、そのまま脇腹から腰を指先でなぞりながらすべり落ちた。

CDラジカセから聞こえるやかましいドラミング(ドラムの演奏)に合わせて、左足がだんつと地面を蹴る。リズムに完璧に合ったジャンプ。男の身体がふわりと宙に浮いた。

一回転して、舞い降りて、地面に両手をついて、また伏せる。大きく足を開き、そのまま手首と腕の力だけで倒立したまま、ゆつくり時計回りに回ってゆく。

——こんな踊りがあるのか。

シッカは夏虫が火に引き寄せられるように、ふらふらと男に近づいた。

踊り終えて汗まみれになった男が、ようやく気づいたようにシッカを振り返った。くつきりとした顔立ちに、濃い眉毛が印象的だ。男はシッカをじろりと眺めると、眉をひそめる。

「警察呼ぶなよ」

第一声がそれだった。

シッカは、警戒心の強い猫のように、ほんの少しずつ、地面にあぐらをかいている〈濃い眉さん〉に近づく。

「……いまの、ダンス……」

小さくこぼしてから、いったい何を聞くつもりなんだと混乱する。

〈濃い眉さん〉は、別の理由でそわそわと落ち着かないようすだ。

「きみ、未成年だよな？ いきなり、警察呼ぶなとか、ごめんな。でも一応、市がカンリしてる公園だから、夜に音楽鳴らして踊ってるよ、ツウホウされることがあんだよ。とくに、未成年といっしょとか、ヤバいから。……何だよ、おれの踊り、そんなによかった？」

ぼーっとしているシッカに向かって、にやつと笑う。

シッカはこくこくと首を縦に振る。

「おれ、一応プロのダンサーでさ」

ふたたび、うなずきを返す。義足であろうがなからうが、あれほど洗練された動きをする踊り手が、アマチュアだとは到底思えなかった。

「でも貧乏ダンサーだから、毎回スタジオ借りて練習できないんだよね。で、明後日に本番があるから、練習してたってわけ」
「本番？」

〈濃い眉さん〉は、サーフパンツのポケットをこそそこそ探ると、くしゃつと丸まった紙切れを差し出した。
受け取った紙を広げてみる。それはカラーのA4チラシだった。

子どもたちが踊っているイラストの上に、カラフルなフォント（文字のデザイン）で、第三回市川市ダンスバトルやヤングスターズと

書かれている。開催日時は明後日の土曜日となっていて、開催場所は、シッカも何度も行ったことのある市民グラウンドだ。

出演者の欄に、赤ペンで○がつけてあった。

—— 舞踏家（ダンサー）、岬勇二——

肩書と名前を読み上げたシッカに、岬は子どものように得意げに胸を反らせた。

「おう。それ、おれの名前。もうじき二十八だから、ヤングスターって歳でもねえけどな、ゲストで呼ばれてんだ」

チラシの字と、岬の顔を何度も見比べる。岬はそんなシッカをしばらく面白そうに見上げていたが、やがて苦笑した。

「もう家に帰んなよ、何でこんな時間にうろろしてんだか知らないけどさ。おれのダンスが気に入ったなら、練習の見学にでもくればいい。ちょうど明日、スタジオ練習が入ってるし。午前中だから、学校あるかもしれないけど」

そう言うと、岬はシッカに八幡一番街にあるというスタジオの名前を告げた。

朝、ベッドで目が覚めたときにはもう決めていた。

—— 今日、学校に行かない。

行っただと、巧にサンババアと言われ、机の傷を数えるだけのことだ。休んだところで、だれも心配もしないだろう。だから今日こそ行かない。本当はもうずっと、学校に行きたくなかった。

担任から家に連絡がくるかもしれない。それでもいい。ゆうべ両親の前であれだけ爆発したのだ、いまさら取り繕うことなんてない。

ゆうべ、十時過ぎに家に戻ってきたシッカを、由美もミゲウも叱りつけることはせず、ケーキを化粧箱から取りだすときのよ

うに、そろりと扱った。
シッカも両親には一言も話しかけずに、シャワーを浴びて寝てしまった。由美は朝から教室に行っている。店を開ける前の父親と朝食前にリビングで鉢合わせしたものの、おはようも言わずに顔をそむけた。

悪いという気持ちがないわけではないが、これでしばらくサンパウロの親戚の話も、サンバの話も聞かずにすむと思うとせいせいする。

今日、サボるなんて大それたことを実行できたのは、やはり昨日、岬のダンスを見たせいかもしれない。義足で自由に、大胆に、青い火のように踊る彼のすがたに、シッカの中の何かが動いた。

父親の目をごまかすために制服に着替えて、いつものように家を出る。ゆうべ岬がシッカに告げた練習の開始¹⁰ジコクは九時だった。

八幡一番街までは、近道すれば自転車で五分とかからない。

最近めっきり人通りが少なくなった一番街をノーブレーキで突っ走って、一番端にある雑居ビルの前で自転車をとめる。ビルの二階の窓に、「わをんだンススタジオ」とペイントされている。一階のクリーニング店脇から、幅の狭い階段が二階に続いていた。

自転車の鍵をかけながら、シッカはふと真顔になる。

——何やってんだろ、あたし。

いまならまだ、引き返せる。いったんかけた鍵をかちやりと解錠したそのとき、後ろから人がきた。「あ」とつぶやく、聞き覚えのある声。

驚いて振り向くと、そこに岬本人が立っていた。

今日は、ハーフパンツの下から、義足の黒いチューブが伸びて、足首にあたる部分から先がNIKE^キ（スポーツ用品のメーカー）のバスケットシューズに収まっている。手にはペットボトルが入ったコンビニの袋。昨日は座った姿しか見ていなかったが、こうして見上げると岬の身長は百八十近くありそうだ。

岬は制服姿のシッカを見て目を丸くする。

「昨日の子だよな。ホントにきてくれたんだ。……中学生？ 学校どうしたの」

その少しコマ¹¹った顔を見て、気づいてしまった。見学に誘ってくれたのは、未成年を家に帰すためのハウベンで、学校があつて

これなないと見越した上のことだったのか。いたたまれなくなったシッカが踵を返す前に、岬はふふつと笑った。

「……ま、いつか。こっちなよ」

うむを言わず階段をのぼられ、半透明のドアの向こうに押し込まれる。

スタジオの前一面に張られた鏡に思わず足がすくむ。全身が映る鏡を見るなんて、いつぶりだろうか。岬はそんなシッカをちらりと見てから、名前、と短くたずねる。

⑥……あたし、加藤トモミです。突然きちゃって、すみません」

シッカは小さな声で名乗った。とっさにフランシスカと名乗らなかったのは、もしかしたら両親への当てつけなのかもしれないかった。

「見学つつつても、ひたすら踊ってるだけなんだけど」

そう言うと、岬は棚の上にあるオーディオセットの再生ボタンを押した。

とたんに、スタジオの中に、脳みそが吸いだされるような重低音が鳴り響いた。

「これはちょっと前に流行った『Clarity』って曲のドロップ。あ、音楽のサビ（曲の聞かせどころの部分）のことを、EDMじゃ、ドロップっていうんだけど」

「EDM？」

「ああ、エレクトロニック・ダンス・ミュージックの略。シンセサイザーとかの電子音を使いまくってコンピューターで作る音楽のこと。ドロップのここはだいたい音圧がドカンとでかくなる。今年はEDMメインで踊ってるんだ、おれ」

岬はそう言うと、義足でない方の足を軸にして右回りにくるとターンした。そのまま複雑に入り組んだステップを8カウントしたあと、目にもとまらぬ速さでフロアに両手をつき、長い両足をブン回す。ワンカウントで三百六十度、ど派手なブレイキング

の技^{ダンス}。モダンバレエにも似たゆうべの動きとは違うが、こっちもすごい。

曲が終わり、シッカは、夢中になって拍手を送っていた。当の岬は、床にべったりと座り込んだ体勢でシッカを見上げて「ども、ども」と笑っている。

子どもみたいに楽しそうな岬を見ると、隠したり、意地を張ったりするのがばからしくなってくる。岬がペットボトルを手にしたタイミングで、シッカはヒミツを打ち明けるように、ひそひそと言った。

「……あたし、本当の名前は、加藤トモミ・フランシスカっていうんです。パパはブラジル人で、ママは日本人。ついでにサンバの講師」

「へえ！ ダンサーの血を引いてんのか。いいなあ。将来ユウボウだ」¹⁴

シッカは意外に思った。この人は、父親がブラジル人ということより、ママがダンサーであることに反応するらしい。

「ダンスなんてやりません。ブラジル人らしいリズム感だつてないし……」

ブラジル人らしい、と何の気なく口走ってしまった自分が嫌になる。

真つ赤になつてうつむいているのを、どう思われたらどうか。岬はふうん、とつぶやくと、身を屈めて義足のチューブを撫でた。

「——ま、ブラジル人にもリズム音痴はいるよな。リオ（ブラジルの都市）のカーニバル、テレビで見ても、沿道のおっちゃんとかで明らかに盆踊りだろつてのいるし。楽しそうだけど」

「……サンバなんか見ないし。あたし、ブラジル人じゃないし。……日本人らしくもないけど」

思わず怒つたように吐き捨ててしまい、シッカは泣きそうになった。まるで小さな子どもだ。「らしい」「じゃない」「らしくない」。かちゃん、がきん、心のどこかで音がする。言葉の鎖と気持ちの鍵のせいで身動きもできない。もうやだ、とつぶやいた。

岬はそんなシッカをまじまじと見ている。気まずい空気の中、岬がするりと目をそらしてつぶやいた。

「——おれ、プロのダンサーになつてまあまあ上手くやつたときに事故にあつて、この足になつたんだ。前にテレビで、ヒゲキの義足ダンサーとかいって小っちゃい特集組んでもらつたこともあるんだぜ。そんなときに、あるスタッフさんに言われたの。感動

エピソード何かありませんか、つて」

「何それ」

思わず顔をしかめたシッカを見て岬がにっと笑う。

「だろ。ずっとダンスについて熱く語つてたのがマズかつたんだろうけどさ。ま、らしくしてろつてことなんだろうな。お涙ちょうだいって感じじゃねえからなあ、おれ。関係ないかもしれないけど、何か、いまの加藤サン見てたら、思ひだしたよ」

岬は今度は、からりと声を上げて笑った。夏空みたいな笑い方をする人だ。

「……おれに言わせりゃ、らしさつて、ろくでもねえ魔法だよ。どっかで聴いたような呪文を壁に向かってブツクサとなえて、その反響を自分で聞いてさ、なんとなく納得する。これでみんなといっしょだつて安心したり、おれだけは特別じゃなきゃいけないって思い込んだりさ。自分で自分に魔法をかけちゃうんだから、お笑いだ」

シッカは言葉が返せずに、だまって何度か瞬きをした。樹里（シッカの友人）と話していたときと同じだ。大事なことを聞いているかもしれないのに、頭でちつとも吸収できないのは、自分の中に、スポンジがないからなのだろうか。

岬がシューズのひもを結びなおしながら、歌うようにささやく。

「国籍。手足の数。セクシャリティ（性について）。肌の色。どれ一つ、おれのダンスにや関係ないね。大事なのは表現することだ。何に喜んで、何に怒つて、どんなリズムに乗つて、どんな唄をかますかつてこの方が、ずっと大切。つてのはウソだけど」

「う……ウソなんだ」

シッカはがくりと肩を落とす。

ちよつとカッコいいと思つたのに。岬の話は、どこに落とし穴があるか、油断できない。岬はにやにや笑っている。

「さあ。おれは一生かけて、自分を知りたい。加藤サンも、加藤サンのやり方で、そうしたら。ひとのセリフで納得するなんて、もったいないだろ」

シッカはゆっくり瞬きをした。

他人のセリフなんかで納得しない。自分なりのやり方で。

——あたしの中にも、スポンジがあった。

岬の言葉がやっと心の中に染みてくる。中華あんがフライ麺に染み込むくらいの、とろみ速度で。岬はよいしょと立ち上がると、いいことを思いついたという顔で、シッカを見下ろした。

「そうだ。加藤サンも明日、踊ってみる？ ドロップのところでいいから、サプライズゲストってことさ」

シッカは、手に変な汗をかいている。

「ど、ドロップのところ？」

「サビんとこだけ、踊ってみなよ」

「無理。やだ。絶対、無理」

反射的に、首を横にぶんぶん振ってしまふ。

「そう？ 基本的な動きを二、三教えてやるからさ。どうしてもヤダってんなら、いいけど。今回のダンスバトルのおれのテーマ、〈目覚め〉なんだよね。加藤サンって、いま、雰囲気そんな感じ。……ダンス、ほんととは好きなんだろ？ さっきおれが踊ってたとき、身体、動いてたよ」

さらにとした岬の言葉に、思わずときりとしてしまふ。濃い眉の下で輝くふたつの目に、心の奥まで見透かされそうさ。

どうする、と首をかしげられ、奇妙なことに、シッカはすぐに断ることができない。そしてもっと奇妙なことに、なぜか、数秒後には「やります」とうなずいていたのだ。

(黒川裕子 『夜の間だけ、シッカは鏡にベールをかける』)

問1 線部1～15のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 線部A「眉をひそめる」(7ページ)・B「いたたまれなくなった」(11ページ)とありますが、この言葉の本文中の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---|-----------------|
| ア | 心配に思い、泣きそうになる |
| イ | 不満に思い、ふくれつつらをする |
| ウ | 迷惑に感じ、おどしつける |
| エ | 疑問に感じ、よく観察する |
| オ | 不審に思い、しかめつらをする |

B 「いたたまれなくなった」(11ページ)

- | | |
|---|----------------------|
| ア | 相手の真意に気づき、腹立たしくなった |
| イ | 自分のしたことに後悔し、情けなくなった |
| ウ | 事情をさとり、その場を立ち去りたくなった |
| エ | 迷惑をかけてしまい、申し訳なくなった |
| オ | 子ども扱いされて、我慢できなくなった |

問3 線部①「シッカちゃんて、チョコなの？」(3ページ)とありますが、この質問でシッカが聞きたかったことは、どういうことですか。三十字以内で答えなさい。

問4 — 線部②「そんなことは意地でも口にしない」(4ページ)とありますが、ダンスに対してシッカはどのような思いを抱いていますか。母親への思いをふまえて、九十字以内で答えなさい。

問5 — 線部③「電気ショックを受けたのは、シッカも同じだった」(5ページ)とありますが、どういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア シッカが学校で「サンババア」と呼ばれていることを明かして怒りをぶつけたことで、母親はうろたえたが、一緒に怒ってはいけなかったため、その様子を見て、結局娘の自分よりもサンバのほうが大切なのだと気づき、シッカは動揺したということ。

イ シッカが学校で「サンババア」と呼ばれていることを明かして怒りをぶつけたことで、母親は最初言葉を失ったが、すぐに冷ややかなまなざしを向けてきたので、自分がいやな子だと思われてしまったことに気づき、シッカは予想外のことにかなしい気持ちになったということ。

ウ シッカが学校で「サンババア」と呼ばれていることを明かして怒りをぶつけたことで、母親は驚きかなしみ、ひきつったような表情になったので、その様子を見て、自分に意図的に人を攻撃するような一面があったことを知り、シッカは衝撃を受けたということ。

エ シッカが学校で「サンババア」と呼ばれていることを明かして怒りをぶつけたことで、母親は驚き青ざめて、そのまま何も言えなかったため、その様子を見て、自ら口にした「サンババア」という言葉の残酷さに気づき、シッカは顔色を失ったということ。

オ シッカが学校で「サンババア」と呼ばれていることを明かして怒りをぶつけたことで、母親は突然のことにつるな表情になったが、なぐさめてはくれなかったため、両親は自分の苦しみを本当には理解できないと思い、シッカは急にむなしい気持ちになったということ。

問6 — 線部④「そう、踊っている、ように思う」(6ページ)とありますが、ここで「ように思う」として、「踊っている」と断言していないのはなぜですか。五十字以内で答えなさい。

問7 — 線部⑤「夏虫が火に引き寄せられるように」(7ページ)とありますが、これはシッカのどのような様子を表していますか。三十字以内で答えなさい。

問8 — 線部⑥「……あたし、加藤トモミです」(11ページ)とありますが、シッカがここでフルネームを名乗らなかったのはなぜだと考えられますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 全身が映る鏡を目にして、ほかの人とは違う自分の外見を再確認し、自分がブラジル人の血を引くことを象徴する「フランシスカ」という名前に改めて抵抗感を覚え、その名前を岬に言わないことで自分をほかの人とは違う姿に生んだ両親への不満を示そうという意識が、自然と働いたから。

イ 岬も巧と同じように、ほかの人と外見の違う自分をばかにするのではないかと心配していたところ、岬に無理矢理階段をのぼらされて、全身が映る鏡のあるスタジオの中に押し込まれ、自分の姿をまじまじと見て、両親が付けた「フランシスカ」という名前への嫌悪感をはっきりと自覚したから。

ウ 全身が映る鏡のある正式なスタジオに来たことで、ほかの人とは違って片足が義足である岬のダンスに向き合う真剣な姿勢を感じ取り、自分もほかの人と違う姿に思い悩んだりするのではなく、「フランシスカ」と名乗らないことで、日本に住む一人の人間として生きることを受け入れる思いが出てきたから。

エ 岬が練習するスタジオの全身が映る鏡を見たことで、ほかの人とは違ってブラジル人と日本人の両親を持つ娘として生きるつらさがこみ上げ、「フランシスカ」という名を付けた両親に対する昨夜の怒りがよみがえったが、その怒りを岬には悟られなくなかったから。

オ 昨夜、岬が見学にでもくればいいと言ったのは、その場しのぎのいい加減な言葉であったということに気づいたものの、岬と一緒に全身が映る鏡を前にして、自分と同じくほかの人とは違う義足の岬が日本人であることに親近感を覚え、「フランシスカ」というブラジル人の親の血を引く名前を隠したくなったから。

問9 — 線部⑦「言葉の鎖と気持ちの鍵のせいで身動きもできない」(12ページ)とありますが、このときのシッカの心情として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「ダンスなんてやりません」という言葉が本心とは反対に一時的な母への怒りのために発せられたことから、突発的に怒るにせよ「なんて」という言葉が大好きなダンスを侮辱したことになると気づいて、後悔している。

イ 「ブラジル人らしいリズム感だっけないし……」という言葉は何気なく口にしてしまったことから、ブラジル人は皆リズム感が良いという偏見を自分が無意識に抱いていることがわかり、やるせない思いでいる。

ウ 「……サンバなんか見ないし」という言葉が投げやりで乱暴に口をついて出てしまったことから、ダンスに情熱をかける岬の心を傷つけ自分に対する彼の関心が薄れるのではないかと不安を抱き、途方に暮れている。

エ 「あたし、ブラジル人じゃないし」という言葉が感情にまかせて発せられたことから、ブラジル人と日本人を両親とする自身の生い立ちを心の底から憎んでいる自分の感情を改めて思い知らされ、あきれている。

オ 「……日本人らしくもないけど」という言葉が思わず出てしまったことから、自分が苦しめられている「らしい」という枠組みに基づいた物の見方に自分もまたとらわれていることに改めて気づかされ、もどかしさを感じている。

問10 — 線部⑧「つてのはウソだけど」(13ページ)とありますが、このように言ったときの岬の思いとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真剣に聞いているシッカに向かって自分の考えを熱のこもった口調で語ったが、シッカには自分の話に簡単には納得してほしくない。

イ 中学生のシッカにも理解できるようにと自分の考えをつい表面的に語ってしまったので、それを否定することでダンスの奥深さを伝えたい。

ウ 悩んでいるシッカに対して自分の考えをおしつけがましく語ってしまったことに気づいたが、自分がずうずうしい人間だとは思われたくない。

エ シッカが悩んでいることを感じ取り体験談も交えて自分の考えを語ってきたが、最終的にはシッカ自身に大事なものは何かを考えさせたい。

オ シッカと自分の共通点に気づいたことで自分の考えをついおおげさに語ってしまったが、その発言が本心であるとは思ってほしくない。

問11 ……線部X「スポンジがない」(13ページ)・Y「スポンジがあった」(14ページ)のように、シッカが相手の話を理解していく様子が「スポンジ」という言葉を用いて表現されています。「スポンジ」以外に、シッカが相手の話を理解していく様子を表すために用いられている二字の語を抜き出して答えなさい。

問12 — 線部⑨「なぜか、数秒後には『やります』とうなずいていたのだ」(14ページ)とありますが、それはシッカがどのようなことに気づいていたからだと考えられますか。シッカの心情の変化をふまえて、百字から百二十字で答えなさい。

問13 本文の特徴について述べたものとして誤っているものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「パパもママも何もわかっていない」(5ページ)など、語り手は主人公の心情を直接語っているように、岬や母といったほかの登場人物の心情も直接的に表現している。

イ 登場人物の発言の中に「……」や「——」を用いることにより、言葉だけでは表しきれない登場人物の心情を表現する効果をあげている。

ウ 「言って」(5ページ)・「音庄」(11ページ)など、語句に本来の読みとは異なる特殊な読み方をつけることで、人物の心情や特徴を際立たせる効果をあげている。

エ 「溶岩がどろっとあふれだす」(4ページ)・「夏空みたいな笑い方」(13ページ)など、比喩を用いることで、登場人物の様子を印象的に表している。

オ 巧や両親、岬など様々な人物との交流を通して、主人公が悩みを抱えながらも自分のことを見つめ直し、たくましく成長していく姿が丁寧に描かれている。

カ 「由美」「母親」「ママ」のように、語り手が同じ人物に対して複数の呼び方を使い分けることで、主人公とその人物との関係性や心の距離感などを巧みに描いている。

